

時代を読み解く

シリーズ 47

自らに有利となる
認知態勢を形成へ

『孫子』の兵法に「人を致して、人に致されず」という有名な言葉がある。

後に同書に注釈を付けた十一家の一人、北宋の張預は、利害によって敵をこちらの思惑通りに動かして、虚の状態に陥らせ、こちらは準備をして実力を蓄えて待ち構えると解説する。

中国は春秋戦国の時代から、いかに相手の態勢を崩して隙を突くかという認知が探求され、実践されてきた。この伝統的思考に最先

端技術と西洋の認知戦研究が融合されたのが中国独自の認知戦であると言える。中国における認知戦の定義の一つは、まず、多くの最先端技術を活用し、多層的な情報手段によって、影響を与えたい対象の視点、

政策▽イデオロギー▽軍事行動▽制度▽国家の地位▽国家の大戦略▽国家の歴史▽国家の未来発展目標▽伝統文化概念——など、関連する問題の認知に影響を与え、支配と操作を行い、自らにとって有利な認知態勢

展に対する国際社会の誤った認識を形成し、国家イメージを毀損し、中国が正當に発展する権利を否定しようとしている」との公式見解を示している。

この複雑かつ厳しい国際権と国際伝播能力を認知戦と一体的に運用しようとする

葉に重きを置いている。国共内戦時の「毛沢東主席の雄弁な文章によって敵の5個師団を撃退した」という故事が示すとおり、世論戦において無形の剣を抜くことも軍事力の重要な要素と考えている。

平和的台頭物語で
対外世論環境創出

その文脈の中で、習近平強軍思想は、国益と人民の保護のための国力に見合った軍事力の獲得や、国際平和活動などへの貢献による平和的台頭という物語の一つとして、政府や人民解放軍がネット上で積極的に発信していると考えられる。

中国の認知戦と国際話語権

中国が世界に発信する「物語」にどう向き合うか

態度、観念、自己同一性、自信、信念、信仰、思想、思惟などを争奪する。

その上で、個人または集団の政治・経済、社会、文化、国防軍事、教育、科学技術などの領域における特定の人や物・事件▽計画▽

を仕掛けており、中国の発展、より効果的な「国際話言葉、特に文章化された言

中国は、伝播力が影響力を決定し、「話語権こそが主権となる」という認識のもと、「新型大国関係」人類運命共同体「習近平強軍思想」「二帯一路」——

中国は、「習近平重要講話」に代表されるように、

国際話言葉、特に文章化された言

国際話言葉、特に文章化された言

国家利益の核心を
成す「国際話語権」テーマをさらに深掘り
「防研セミナーブリーフィング」

執筆者の伊藤3空佐が今回のテーマをさらに深掘りして解説し、防衛省職員と突っ込んだ議論を行う「防研セミナーブリーフィング」が12月22日（月）午後3時～4時まで、市ヶ谷のF1棟6階「国際会議場」で開かれます。参加者・聴講者は隊員に限定します。ご興味ある方は奮ってご参加ください。▽問い合わせ＝防研企画調整課03—3268—3111（内線29177）まで。

伊藤 大輔 3空佐

防衛研究所 戦史研究センター
安全保障政策史研究室所員

1976（昭和51）年生まれ。北海道出身。宇都宮大学大学院修了（経済学修士）、埼玉大学大学院修了（経営学修士）。開発集団、南混団、8空団、空幕防衛部、空幹校、中空などを経て2024年6月から現職。専門は軍事ドクトリン、旧海軍航空、習近平強軍思想。共著に『アミオ訳孫子』（ちくま学芸文庫、16年）、『米軍式人を動かすマネジメント』（日本経済新聞出版、16年）、『黄色い零戦』（飛鳥新社、21年）、『マレー進攻航空作戦』（芙蓉書房、23年）などがある。

